
霧現 きりうつつ

紘見愉來

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

霧現 きりうつつ

【Nコード】

N4255T

【作者名】

絃見愉來

【あらすじ】

自ブログにて掲載中。

最初に目に付くのは正面にある幅広の階段。

木製の手摺りの表面は光を反射するほどに磨かれているけれど、施された細工の僅かな隙間には、拭き取り損ねた埃が、薄っすらと、身を縮める様に居座っている。

階段は踊り場で二手に分かれ、左右へと伸びていく。

上りきった先は、真っ直ぐと繋がる廊下。廊下は、片側に教室、片側に窓が規則正しく並んでいる。

来た方向をくると振り返ると、階段部分だけが、ぽっかりと、抜け落ちて見え、その先には、ほとんど対称に見える廊下が存在する。すると、まるで鏡の中に納められてしまったような心持ちになるのが面白い。

階段から左右に分かれた廊下は、どちらも同じ距離だけ伸びると、かくんと一度だけ、直角に折れ曲がる。

この建物は、大階段を中心に、コの字形になっている。そのコの字の内側、学校の敷地外から隠れるように、古びた建物が一つ建っていた。

「講堂ですか？」と、初めて建物内の案内をされた時、僕は口にした。

取り立てて気になった訳でもないが、木造の校舎はきつと、隙間だらけの筈なのに、春休み中である校内は静まり返っていて、少しは居るのだろう部活動に向いた生徒達の声が遠くに僅か聞こえるのが、尚更に静けさを煽って、息が詰まりそうだった。

いや、それだけではなかっただろう。

案内役の教頭は、実に想像力の欠けた僕の脳内から思い描かれる、往年の洋風館お抱えの女家庭教師しかりとした風情であって、居た堪れなさを誘った。

この場に似合い過ぎている風貌それは、能動というものと近しくない僕においても、会話のとは口を模索させ、あまつさえ実行に移させるという、強大な威力を伴った冷気を放っていた。曰く、「違います」との一言で、ぴしゃりとその場に沈められることとなった。

静けさは強度を増してやってきて、いつか呼吸の仕方も忘れるだろうと思われ始めると、がらりと戸の開く音が響いた。それはどこまでも、廊下を伝って抜けていく。

どれもこれもが同じに見える戸の一つ、一番近場にあつたそれを、開いたのは教頭であつた。

ものも言わずに教室内へと進んでいく後姿を見、これはついて来いと言っているのだろうか？ と僅か逡巡し、急いで後を追う。

既に窓の前に立つ影に並ぶと、教頭はゆっくりと窓へと指差した。右手側には校庭が広がる。まばらに人影が見えた。

近くの者は、それでも人を模って見えるけれど、遠い者は、私の目には、平面に立ち上がる砂鉄のように映つた。

うごごと動く姿が尚似ている。

校庭と校舎の間には道がある、そこを奥へと、つまり、こちらから左手側に行くと、数本の木に囲われた、講堂らしき建物があつた。それは中庭の建物に良く似て、ただ少しばかり古さが薄れているようだった。

なるほど、こちらの方が生きている。単に光に当たっているせいかもしれないかった。

「あちらが講堂です。少し離れていますから、時間にはお気をつけになりますように」

「随分と、似ているんですね。その、中庭の建物に」

「勿論です。同じ造りですから」

「では、あちらもやはり」

「そうですね、造りは。けれども、今現在、講堂はこちら一つです」「そうですね。では、あれはいずれ壊されるのですか?」

「いいえ、そんなことをする訳が無いでしょう?」

教頭の眉が、きりりとつりあがったように、横目に見えた。だんだんと、息苦しくなるのを感じていた。

僕を息苦しくさせるのは、なにも、深海の底のような静寂ばかりではなかったのだ。

僕と教頭の発する言葉は、冷たく、雪のように降り積もり、いつか埋もれて窒息する姿が思い浮かんだ。

けれども、降り積もる雪なんてものを、急に止めるなどという特殊な術は、僕には持ち合わせが無かった。

「だって、講堂は二つもいらないうしょう?」と、しどろもどろになりながら言うと、「だって?」と、教頭は一層眉を顰めた。そして、僕の浅くなっていた呼吸は落ち着きを取り戻した。

反復された言葉に、ようやく人間味を感じることが出来た。

「それにしても、勿体無いですね」

「何がです?」

「ここは、建物がほとんど対称であるのに、あの講堂を含めると崩れてしまう」

「あそこに建てるしかなかったのです」

教頭の横顔は、熱心に、建物を眺めていたけれど、その肩や、すつと伸びた背は、まったく集中していなく、どこかよそへと気を散らしているように見えた。それに、と教頭は後を続けた。

「それに、対象であること、何かの規則に則っていること、それは難しいようで簡単で、非対称であること、無規則であること、それも簡単なようで難しい。整然となること、雑然とすること、どちらもが意識すると困難で、不自然で、是非を判断することは難しいもの」

まるで呪文のようだと僕は思い、「はあ」と空気漏れのような言葉

がこぼれる。

「いずれ、選ばざるおえないのは自分自身です」

その時、初めて教頭と目を合せた。思っていたよりは若いのかもしれなかった。

参りましょう。 はい。

廊下に出ると、一度僕を振り向き、それから、どれもこれも同じに見える窓の一つ、一番近場にあったそれを見やって教頭は、中庭の建物が立ち入り禁止であることを告げた。

うららかである春に似つかわしくない、虚無感と共に目が覚めた。体を起こしてカーテンの隙間から漏れる光に、そのむこうに広がる味気ない景色を思いながら、しばらくそのまま過ごす。

こんな目覚めは時折やってくる。そして大抵は、こうしてベッドの上でやり過ごして、通常の、空気感を取り戻すまで、じっと息を潜めて動かない。

そんな時の体内時計は大概が狂っていて、取り戻した暁には、大いに急いで身支度を整えることを余儀なくされる。

朝の日差しは体に悪い。たとえそれが、夏の日差しに遠くても。少なくとも、僕にはそう感じられる。

日差しが透かしてくれるのなら、まだ救いがある。半透明であることの不都合が僕には思い当たらない。

もちろん、それは一定条件のもとには嘘である。

ともかく、照らしてやるうという陽光は、浮き上がらせ、曝してやるぞと、変換される。

一度太陽を見上げ、その輪郭を直視するのが困難で、俯いてため息をつく。

この春から臨時教師の職を得て、朝型の生活に移行したけれど、上手くない。

生来の性と言っても過言ではなくなってしまうた夜更かし癖は、年

期が入っている分、矯正するのは困難を極める。

つい、舌打ちがでた。

勿論眩しさを押し付ける太陽にはない。例年より早い段階で訪れた暖かさに誘われて、朝だというのに活発に、飛び回る虫にである。小虫ならば気にならない。

肩や腹にぶつかられようが、騒ぐような乙女ではない。しかしながら、時には人の黒目ほどもあるやつが、死角をついて現れる。顔になど当たられると流石に不快で、微かに痛い。

大体今日は日が悪い。

なんといつても寝覚めが悪かった。けれどもそれは致し方がない。今日は明日に、明日は明後日に、そういう道しかないのだから、過ぎた朝に文句をたれても仕方がない。それに最悪というわけでもない。

寝付きの悪さと、夢見の悪さに定評のある僕だけれど、その僕をしても今日の夢見は最悪とは言い難い。

もしも、最悪である日ならば、ちよつとそこまで所用を済ませて、さあ帰りますかと一息つけば、傘立ての傘が盗まれて、申し訳なさに縮んで見える主なき傘を手を取れば、お世辞にも小さいとは言いがたい穴が一つ、二つ、向こう側を覗かせて、それでも無いよりマシさと駆け出すと、襲いくる集中豪雨、オアシスの如き百メートル先のスーパ―、駆け込む先には艶やかなタイル、濡れた靴が悲鳴をあげる、入り口付近を陣取る花屋、あでやかに笑い並ぶ花々、醸し出される芳香が、鼻につく前、花立てに激突、取り返しよのない濡れ鼠になる。

などということが、参考として幾つも引き合いに出す事が出来る。往々にして、持久力とは疎遠の僕でありながら、虚無にまつわるエトセトラ。

とろとろと胃の底を浅く蠢く不安溶液。そこから沸き立つ刺激性気

体。体内巡って不協和音。

それらに関して働く積極的な慣性の法則。不運ではなく、呪いなどには程遠い、自業自得の賜物である。

ともあれ、好みでなくとも、清々しさの演出に一役買う日の光は、杞憂をはらうだけの存在価値を示している。

石畳の坂の上に、僕の勤める学校は存在する。

背景には山を背負い、けれどもその山は、聳えるという印象に薄く、なだらかで圧迫感がないところが好ましい。

この街は海に囲まれている。それから、霧がよく発生する。

それは街の中をうねうねと這い回り、もれなく石畳の坂をも這い登り、山ごと覆い隠す事もままあった。

僕は霧の中を歩き回る事を趣味の一つとしていた。

周りのものがすっかりと覆われて、立ち位置把握機関が乱されるのが心地よい。肌の表面、皮膚が、産毛が、ちりちりと、水気に巻かれるようなのも心地よい。

何よりも、何かに覆われる状態というのは、僕をひどく安心させた。そんな訳で、僕は霧の夜には、普段には見せない行動力でもって、外へと飛び出す。

殆んど利かない視界に突如現れるものが、錆を浮かせるポストだったとしても、僕は大いに歓迎し、再会を喜んだ。そんな時、ポストの方では、面映さを押し隠したように、その赤を闇に押さえて憚然としてみせるのだ。

学校へと伸びる坂道、朝のこの時間は、人がまばらだ。上る人、下る人、ぼつりぼつりと距離がある。

学校の門をくぐると、両脇に桜の木が並んで迎えてくれるのだが、今年は春の来るのが早すぎて、既に葉桜となってしまうている。

木造の校舎内は、今時分はまだひんやりとしている。

その空気を伝って、トランペットやサクソスや、判別不能にめいめ

いの、音が混じりあって届けられる。

つやつやとした廊下に、足を乗せる頃になってようやく、僕は社会性という機能を開始する。動悸を速める静けさも、それを促す遠くに聞こえる喧騒も、緊張感を与える上司も苦手である。

まして神へ執心など露もない。それでも、この学校で働くことを決めたのは、この艶やかな廊下が、出迎えてくれるからかもしれない。つた。

念入りに磨かれて、つやつやと、どこまでも這い巡る廊下。そこには、艶やかさの邪魔をする、例えば、白線などが描かれて鈍らせるわけでもなく、そしてここには生涯、そういったものが引かれることはないだろうと思われるところが好ましい。

「お先に失礼します」

そう聞こえて、顔を上げてみたけれど、誰もいない。

こうなると、広くも感じられる室内は黄ばんだ光に満ちていて、それほどまでに明るくない。

確かに人の居たような温もりは散漫と残っていて、どうやら、かけられた声は回り道をして僕の脳に届いたようだった。

その記憶の上澄みに残る声と、考える人のような振りをしながらうたた寝してしまう前の、職員室内に僅かに残っていた面々を思い起こし、そこに教頭が居ないことを確認する。もし彼女が居たなら、僕は蟻よりも狭い肩幅を持たねばならない。

窓に寄って外を眺めると、坂下に灯る、家や、店や、車の明かりが霞がかつて揺らめいていた。それはもう、校庭のむこう端あたりまでやってきている。

これはとても好い兆候だと自席へ戻り、早々に帰り支度を始める。帰りの道々が楽しみでならない。

室内の明かりを消して、廊下へ出ると、濃紺の闇である。

職員室前の廊下は、中庭の建物の背中を斜めから眺める格好だった。僕はもう霧の中へと思いを馳せていて、急ぎ足で玄関へと向かい始

める。すると、窓枠が無ければ、内と外の境目を探すのが困難と思われる、その外側に人影を見た気がした。用務の人だろうと、考えて失敗する。

僕は見た気がするなどと心の内で呟きながら、その実、用務の人ではないだろうと断言する事は出来た。

僕はどうかやら、スカートの裾のようなものを見たのだ。

不審である。生徒であるなら、この時分に似つかわしくない。

生徒であるならば、注意指導するという意欲の持ち合わせもないし、不審者であるなら、勇ましくお縄にするという心意気にも欠けている僕ではあるが、今この時の僕の脳内は、霧に満遍なく侵されていた。

すぐさま、職員室へと取って返し、中庭への扉の鍵を握り締めた。

それは、どことなく手のうちでひんやりとした。

その扉は、右の廊下の突き当たり、つまりコの字の始まりの場所にあった。勿論、左の突き当たりにも扉はあるが、大階段より右側に位置する職員室からは、こちらの方が近い。少しばかりだけでもコの字の奥まった辺り、校舎ほど近くに中庭の建物はあるので、鍵など使わず外を回っても、それ程距離の遠さに違いは出ないのだけれど、右と左の突き当たり、その僅かの差の選択にも、敏感かつ確実に右の廊下を選ぶ僕だから、外を回るなどとは言語道断。

闇に慣れた目で、廊下を突き進む。

幻のような頻度でおとずれる高揚感をもってしても、夜の学校一人旅という薄ら寒さは拭えない。

こんな場合に不思議であるのは、自分の足音が追い寄ってくる何者かのものとして耳に届くことだ。

それを紛らすべく、殊更に床が軋みを立てるように進んだ。

辺りをうかがうと好くない予感がして、つま先ばかりを見る。開校何周年だかに贈られた大きな鏡が無意味に掛けられている前を通る

時、特に体が強張って最早つま先以外は見られなかった。目の前が真っ白になった。

あらゆる皮膚が水気を吸って、行き渡っていく。外は既に濃い霧に沈んでいた。こんなに早く立ち込めてしまうのは予想外であつたけど、こうして包まれていると心地よくて、さつきまでの不安が霧散した。

手の内に残る鍵、その湿り気も、霧のせいにしてしまえる。途端に、霧の街を徘徊する、その時の心持ちが蘇って、小躍りしたような歩みを進めた。視界は利かない。利かないのが素晴らしいのだ。

真っ白な中で、土の匂いがした。草の臭いがした。右足が草を踏む音。左足が草を踏む音。僕の足が草を踏む音が聞こえる。

右足が草を踏む音。左足が草を踏む音。そして、僕の足が草を踏む音以外の音。瞬間光るものがあり、足を止めた。

僕以外に草を踏むものの正体であろう。短く吸った息は、肺までは至りそうもない。

僕が草を踏むよりも、小さく音を立てて近づいてきたそれは、猫であつた。

目は、もう随分前から光っていないといった風に静かである。この目を光らせる光源の在り処もまた、僕には見当がつかない。

発光したのでもあるまいしと、もう一度猫を見やると、僕のあらゆる皮膚は、鳥肌を浮かせた。

猫は白い。霧と同じように白い。なので、その輪郭は境界を見極めるのが困難だ。

それに、何につけても僕は見極めるのが困難な人種である。それでも、それだけは、はっきりと分かった。

猫の尻、そこにある尻尾、それには先が無かつた。

まるで、ぼんぼり綿のように、ちょこんと乗せられているばかりである。

驚くほどの事ではなかった。

近頃では滅多に見掛ける事もないが、僕の小さかった頃には、野良猫の殆どは尻尾の先が無かったし、尾の長い野良猫を見掛ける事の方が少なかったくらいである。

仕立て屋のお婆の仕業であるという噂が、まことしやかに囁かれていた。

商っているのかいないのか、よくわからない店だった。

見るからに小さな襦袢屋であって、通りに面した一窓に、くすんだオレンジ色のビニールで庇のようなものをつけていて、そこで受け付けているらしかった。脇の方には、まさに猫の額と言った風の庭があり、植物の気配は全くしなく、皆が皆枯れていた。

お婆は、白と黒とが交じり合った髪の毛を、後で一つに結わえていたが、何故かいつも、それはごわごわとしていた。夏でも柄物の、おそらく殆どが花柄であった衣服を何枚も重ねて着ていて、膝下丈のスカートから伸びる足は、必ずタイツを穿いていた。棒のような足に合せるのは、辛子色か牡丹色がひときわ好きだったように思う。お婆の猫の額の庭には、野良猫が多く集まっていた、お婆を見掛ける時は大抵、そこで野良猫に餌をやっているところだった。

そういうこともあって、お婆が夜な夜な猫の尻尾を羅紗切鋏で切っている、というのが猫の尻尾に纏わる噂の中で、もっとも小中学生の人気を集めていた。

尻尾を切られた猫が犯人であるお婆のところに通うだろうか？という疑問は少なからずあって、それは、切り取られた尻尾は全てお婆の手に握られたままで、猫たちは、いつか取り返そうと猫かぶりの猫なで声でやってくるのだ、というところに着いた。

あの頃、野良犬もまた、多く街を練り歩いてきた事を忘れてはなら

ない。

猫に餌をやるお婆と目が合った気がした。

「ゆかりさんっていうんだって」という声が聞こえた。

あの時僕は何と言ったか。

霧の中で、真っ白の猫はまだ、こちらを見ていた。真っ白で、ぼんぼり綿の尻尾をつけた猫。

ぐにやりと地面が蠢くような眩暈を感じた。猫が見ている。誘われない。

万に一つ、そのような心持ちがあったとしても、いざなう尻尾の一振り、この白い猫は持っていない。

ぼんぼり綿の尻尾では、単に尻の揺れなのか、判断つかない。それでも僕は、後に続いた。

僕を見る目が怖ろしい。無関心に眺めるようで、僕を読む。

流れた時間、蓄積される事象、附着したもの、欠落したもの、その経緯、細分化して縦と横、見落とすべきものも見落とさずに、読んでいる。

僕は怖ろしい。猫を模る流線形。

尻の、丸いのばかりを追っている。

ともすれば、霧と混じりあってしまう。そしてとうとう、消えてしまった。

無闇に息の乱れるのを感じながら行き着くと、細長い闇のひとすじが立っていた。

僅かばかり開かれた扉に手を掛ける。取っ手はひんやりと、扉は重かった。

通れるだけ広げ、一歩中へと踏み込むと、渦巻く吸引力。知らず、閉じた目蓋を開いてみると、外から入った霧がまっすぐひとすじ、祭壇まで伸びていた。

白線の先、祭壇の上、光る目、闇の中にぼんやりと白い塊。ぼんぼり綿の猫の目が、何故光るのか。

あれは只今然りの僕を見て、昔々の僕の姿と、後々いつかの僕を見る。

今その目を光らせるのは、あの日の日の光。

白線の上を歩くのは、僕ではない。

「ゆうちゃん！」

大きな声で呼ばれた僕は、急いでその赤茶色のタイルの上に駆け込む。

最初を選ぶのは、いつだって彼女だ。

二人で目を合せると、おなかの中がむず痒くなって、くすくすと笑い出す。僕らは手を繋ぐ。

僕と彼女の小さな手は、どちらも湿っていて、少しべたつく。尚更に離れない。

彼女の決めたテリトリーは安全だ。城のように大きく感じられるデパート内で、僕らはひたすら、その、安全色を渡り歩く。

けれども僕らは、そこをどきどきしながら抜け出す。

すぐ隣の象牙色のタイルへと移るのにも、そのどきどきは大きさを増す。そうすると、骸骨が一人物陰からやってくる。僕らを捕まえにやってくる。

すぐにまた、赤茶色のタイルへと入ってしまったえば、そいつは物陰へと戻っていく。

僕らはほとんど距離を伸ばす。僕らが安全色から離れる時間が長いほど、骸骨の数は増えていく。列をなす。

けれどももやっぱり、散らばったどこかの安全色へと入ってしまったえば、奴らは静かに戻っていく。

奴らは骸骨であって骸骨ではない。全身が黒いタイツで覆われている。

単純な背骨、肋骨、骨盤、節が繋がっていない両手足。僕らはからかう様に、赤茶と象牙をくるくると回る。

繋いだ手の湿り気を上げているのは僕だった。捕まった先が、どこへ繋がるのか、僕はまるで知らなかったから。

図書館のロビー、公園の遊歩道、いつでも、どこでも、それは始まり、知らずに終わる。

最初に選ぶのは彼女だ。

道路を一つ、挟んだ区画、端と端に僕らの家はある、突っ切る道は、僕らの遊び場である。

駆け回り、ボール遊びをし、縄跳びをする。

チヨークで盛大な落書きをして叱られ、ぶすくれた顔で水をぶちまけ、靴底を擦らせる。

彼女は選ぶ、白線の上を。

いつも最初に選ぶのは、決まって彼女なのだ。

白線は足型一つ分の幅で、僕らは横並びに手を繋げない。彼女は一人で白線の上を歩く。そこに僕が踏み入れる事は出来ない。

僕はとても羨ましく思う。横並びに手を繋げば、僕らのつま先か踵は、白線からはみ出してしまうから、それはとても好くないことだ。安全色から出る事は重大な問題であって、白線に限って僕は、あらゆる色を持つことが出来ない。

白線定員一名様。

僕らが迫る骸骨と、同じように怖ろしいのは、安全色という二人きりの空間で、違う視点でものを見ること。

僕らは、その安全色の中では間違っても縦に並んだりなどしてはならない。

僕と彼女の見える世界が違う事など、素知らぬふりを続けるためにゆえに、僕は白線に限って、安全色を持たない代わりに、あらゆる色と無縁となる。

なぜならいつも最初に選ぶのは彼女だから。だから僕は白線の上を

歩く事が出来ない。僕は羨ましい。

僕はそつと、彼女の背を押した。彼女の体はぐらりと傾く。これで僕は白線の上に踏み入れる事が出来る。

僕らの道路はいつも静かで、そんな事になるなんて、僕はまるで知らなかった。

ひどい音がした。悲鳴のようで、彼女のものではない。

飛んでいった彼女、転がるバイク、動く人影、ころころと、僕の足元に寄ってきたのはヘルメット。

そこには、僕らを追い立てる全身黒タイトの骸骨よりも、ずっと怖ろしい顔をした髑髏がにやりと笑っていた。

日が高い。影が濃い。落ちるその影の奥から、見ていた。白い、尻尾の短い猫。

ひとすじだったはずの霧が、いつの間にか建物内に万遍なく、行き渡っていた。

すでに祭壇までは見る事が出来ない。かろうじて、足の先辺りは見ることが出来る。

入り口を囲うような半円を描き、小振りのタイルが色とりどりと床に敷き詰められているが、どれもがくすんで見えた。闇のせいかもしれない。

色とりどりのタイルの半円の淵まで進み出ると、その少し先までがまた、見ることが出来る。

描かれた半円の外に敷き詰められたタイルは、一人人が立てるほどの大きさがあった。

状況は、夜霧の散歩とほとんど変わらないように思われるのに、今朝の目覚めの虚無感ばかりが、僕を浸していく。

戻りたい。そう、思う。

けれども、後退することも、振り向き駆け出すことも出来ない。

どこへ？と問いかける自分が、躊躇わせる。

扉の外へ、校外へ、石畳の坂道へ、それとも自分の家へ。もしくは、あの瞬間へ。

おそらく僕が望むのは、もっとも摂理に反したもので、叶わぬもので、思いを巡らせるのも馬鹿げたことだ。

後ろから、前から、引き寄せられて、僕の体が小刻みに揺れるのが感じられた。

未だ手に握られた、コの字の先の扉の鍵を、きつく握り締めた。それはもう、まったく微温まっってしまった。

今はもう、見えなくなった祭壇へと目を向けた。

小振りのタイルで薄暗く彩られた半円から前へ、引き寄せられる、心持ち。

「それでいいの？」と、飴玉のような声がした。

僕の踏み出した右足は、宙で止まる。

目を凝らした足元、見える範囲も、黒、青、赤茶、象牙、それぞれの色が闇色を加えられていた。

その上を、ぐるぐる、ぐるぐる、ぐるぐると、僕の視線は回り続ける。

私が先に選んじやうよ？と声が聞こえた瞬間、僕は一つのタイルに飛び乗っていて、それは象牙色であった。

がらがらと音がした。

振り返ると、扉の前の半円が、ぽっかりと闇に落ちていた。そして、その穴へと、空間を満たしていた霧が、吸い込まれていった。

「それでいいの？」

声が言うと、がらがらと、先ほどよりも大きく音を響かせながら、周りのタイルが闇へと落ちていった。

闇を含んだ象牙色のタイルだけが、ぽつり、ぽつりと残っていた。

その間隔は様々で、タイル一枚ほどの距離に並ぶものもあれば、孤島のように離れているものもあり、その幾つかには骸骨が、引っ掛

ったようにだらりとしている。

全ての骨が揃った一人というものは、居ないように思われた。

「どうするのか、えらばいいよ」

飴玉のようにころころと、彩りあるその声は、僕の記憶の奥の方、
澱みで隠したその底に、馴染み深いものだった。

「何を、選べばいいというんだ？ 僕はいつだって、君の選んだ上
を歩くばかりだ。昔も、今も」

「いつも、そんなことをいうね。いつもえらんでいるのは、ゆうち
やんでしよう？」

「そんなこと、あるもんか」

声を張り上げると、よく響いた。頷くほどの間があった。

「ちがわないのに、へんなの。わかった！ ゆうちゃんは、するい
んだ」

微かな笑い声が伝わってきて、それが過ぎると、耳が痛いほどの静
けさがやって来た。

それはこの場に似合い過ぎて、堪らなく息苦しい。

大きいとはいえ、一人分ほどのタイルの上で、ぐらぐらと体が揺れ
てしまわないようにと、そればかりが気になった。

「わたしと、おなじタイルののってきたのは、ゆうちゃんでしょう
？」

「君が呼ぶから」

「その、ぞうげいろのタイルをえらんだのは、ゆうちゃんでしょう
？」

「君が急かすから」

「わたしのせなかをおしたのは、ゆうちゃんでしょう？」

こおおおっと、闇の底が呻いた。

覗き込むと、眩みに捕らわれ、逃げられなくなりそうので、前を見や
ると、きらりと光った。

意識すると、霧のはれた祭壇の上には、猫が、まだこちらを見ている。あの日を見ていた。

この建物と、同じであって非であるもの。

その建物を眺めながら、呪文のように呟かれた教頭の言葉が思い出された。

いずれ選ばざるおえないのは　　。
力いっぱい踏み出した。

右斜め前方にぼつりとある、象牙色のタイルの上へ。

ずるりと、足が滑りそうになり、慌てて反対側へと重心を傾けバランスを保つ。

闇の底からは、飲み込まれた霧たちが、もやもやと浮上し始めていた。

上がる息を、整える事もなく、次のタイルを目指して飛び乗る。

ころころと笑い声が聞こえる。

あまりに夢中で、その声は遠くの方、水膜一枚隔てたような響きをもって、僕に伝わる。

祭壇へと、近づくほどにタイルとタイルの間隔が、広がってゆくのが感じられた。そして、遠い間隔の箇所にある、そのタイルたちの上には、先客が居て、それでも僕は、構わず飛び乗る。

乾いた音が、足裏を伝う度に、僕は、とても泣きたくなった。

「ひどいんだ」と、声が言った。

「みんな、そこからうごけなくなっちゃったんだよ？」

「君が選べと言ったんだ」

「ほら、また。ひとのせいにする。ゆうちゃんは、その人たちのようになりたくないから、その人たちをふみつぶしているんだよ？」

霧は既に、足元のあたりまで上ってきていた。

もやもや、もやもやと。

それはタイルを隠さんとしていて、僕の選り乗る象牙色では、いざれ紛れて見当たらなくなってしまうだろう。

僕はまた、一つ誰かを踏みつける。

離れる距離間隔に、幾度もずり落ちてしまいそうになる。

僕は、足で、手で、腹で、誰かだった骸骨を、ぐしゃりと潰して、粉にする。僕の体は粉にまみれる。

霧とともに紛れた粉は、僕の鼻から、口から、咽喉を通過して体を巡る。

僕の、内も、外も、白にまみれて、いつか同化する。

それでも僕は、辺りと同化し始めた、自分の体を持ち上げて、前へと進む。

「ひどいことをするゆうちゃんは、それで白猫の目をえぐるんだ」

残りタイル二枚分、僕の足は、とてもとても重たくなった。

ずっと近くに見え始めた猫の目は、相変わらずの静けさで、やっぱり僕を読んでいる。

手の中の鍵を、もう一度、きつく握りしめた。

あれさえ無くなってしまったならば、僕は、一体どうなることが出来るのだろうか。

「この目は、ゆうちゃんなんか見ていない。いまと、むかしと、これからと、どのゆうちゃんだって、見ていない」

体の中から込み上げるのは、霧であり、白粉であり、鼻水であり、涙であった。

僕の中には、色んなものが詰まっている。

「あとちよつとだよ」と言った声は、優しくて、きつと、僕のあらゆる穴から、あらゆる水溶物質を垂れ流させて、干からびさせる、そんな小気味な畏なのだ。

僕は最後のタイルに飛び乗る。姿勢を正して鼻を吸る。ひどい音が響き渡る。

僕だけが、鼻を吸って、息をする。

「わたしは、ゆうちゃんが大好きだったから、また手をつなぎたか

「 たんだ 」

「 僕だって、好きだったんだ 」

ぼんぼり綿の尾の猫の、背後の闇が揺れていた。

僕は手を伸ばした。祭壇までは、あとひと飛び。

半透明であることの不都合と、闇であることの不都合は、それほどの違いを僕にもたらさず、それゆえ僕には不都合ではない。

最後の力で祭壇へと飛び乗った。

ぼんぼり綿の尾の猫は、白毛を揺らして、にゃあと鳴いた。そして瞬間、霧散した。

「 がいこつに、つかまった先は、わたしとゆうちゃんでは、ちがう場所なの 」

飴玉のようだった声が、一瞬間、静かでどこか大人びたものへと変わった気がした。

「 あの時、手をつないでいなかったから 」

ばいばい、またね。と君が言う。いつもと同じ、飴玉みたいにごろごろと。

君の手の、湿り汗ばむ吸引力、僕は何度も思い巡らす。残ったのは鍵一つ。

捕まった先、骸骨と、ころころ共に、笑ったりなど、僕には到底、出来はしない。

昔といつか、後と前、上やら下やら、球になるほど濃密に、絡まるものに、引かれるままに、僕は小刻み、ふるえるだろう。

ならば今少し、骸骨の待つその先を、幾度か先の霧の夜まで、素知らぬふりで通したい。

(後書き)

もやりもやりとした短篇です。

お付き合いましたありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4255t/>

霧現 きりうつつ

2011年5月24日08時50分発行